

海外生活 エッセー

北京事務所

中国で進展するキャッシュレス社会化 ～北京生活はスマートフォンとともに～

(一財)自治体国際化協会北京事務所 所長補佐 横地 義照 (鳥取県派遣)

→ 進む決済のキャッシュレス化

「支払いウェイジンジーフーは微信支付ジーフーバオで!」、「支付宝ジーフーバオは使える?」、「スキャンしてよ!」。

4年振りの中国生活が始まって、私が最初に驚いたことといえば北京でのキャッシュレス化の進展です。フィーチャーフォンの利用者はほとんど見当たらず、皆スマートフォンでインターネットに常時接続し、カメラで2次元コードを読み取り、オンラインのアプリケーションソフトウェア(アプリ)を介して金銭のやり取りを行う風景が、スーパーでも、ファーストフード店でも、果ては道端の屋台でも、見られるようになっていました。現金を用いずにインターネットにつながった携帯電話があれば支払いができるため、「もはや財布を持ち歩く必要はない!」とまで言い切る知人もいます。

日本でのモバイル決済手段といえば、非接触型ICチップをカードや携帯電話などに組み込んで持ち歩き、読み取り機械にかざして決済するものがほとんどです。中国でも地下鉄やバスなどの公共交通機関では、日本と同様に非接触型ICチップを用いた決済手段が一般的であり、利用者は電池や通信環境を気にする必要がなく、これはこれで便利です。ただし、事前にお金をチャージしておく必要があるため、「残額が少なくなったら勝手にチャージしてくれたら楽なのに。」と思う私は、日本では交通系電子マネーをクレジットカード情報と紐付けし、自動的にチャージする機能を利用していました。

一方中国では、銀行でキャッシュカードを作れば自動的にデビットカード機能も付帯されるため、クレジットカードよりもデビットカードが一般的です。店頭での支払時に暗証番号とサインがあれば、直接銀行口座から利用額を引き落とすことができます。この機能だけでも十分に便利ですが、さらに驚きなのは、銀行とは関係の無

い携帯電話アプリを使って、自身の銀行口座より直接入金ができることでした。

→ 銀行口座情報とアプリの融合

インターネット通信販売の普及と共に浸透した「支付宝(Alipay)」、ほとんどの中国人が利用するインスタントメッセージングアプリ上で提供される「微信支付(WeChat Pay)」など、これらのアプリと銀行口座情報とを紐付けすれば、銀行口座から直接、企業や個人、友人との間で金銭のやり取りが可能です。銀行を介さずサインも不要、携帯電話の指紋認証機能を使えば暗証番号すら入力せず瞬時に支払いが完了し、個人利用の範囲なら手数料もかかりません。

こうした決済手段の普及により、さまざまなサービスがキャッシュレスで展開されるようになりました。日本でもサービスが始まったシェアバイク、タクシーなどの配車アプリ、飲食店から料理を配達してもらう出前アプリ、さらにネットスーパーなどの通信販売や、チケット手配といったインターネットを介する多くのサービスで、料金は携帯電話を用いて決済されています。

中国インターネット情報センター(注)の発表によると、2017年6月末現在の中国のインターネットユーザーは7億5,100万人に達し、世界総数の約5分の1、うち携帯電話で接続するユーザーの割合は96.3%とのことです。スマートフォンの普及で瞬く間に進んだ中国のキャッシュレス社会化。次はどんなサービスが流行するのか、目が離せません。

(注) <http://www.cnnic.cn/>



多くの売り場で決済用のQRコードが掲示されています